

大決壊

百合香る夏合宿

「小説」
「イラスト」
遠野渚
奥森ボウイ
Tohno Nagisa
Boy Okumori

～～～～～ 目次 ～～～～

☆ ≡ 一章目 今夜のおかずは先輩のショーツ

☆ ≡ 二章目 先輩のトイレになります！

☆ ≡ 三章目 二人で一緒にお風呂！

☆ ≡ 四章目 おむつを充てられる桃恵

☆ ≡ 五章目 保健室での初体験

☆ ≡ 終章 二人のゴール地点

☆彡三章目 二人で一緒にお風呂！ ～体験版！～

洗い場にある小さな椅子に座ると、後ろから星那がシャワーをシャワシャワしてくれる。

「あーあ。せっかく綺麗な髪の毛が小便塗れじゃねえか。まずはシャンプーしてやるからジッとしてるんだぞ」

「あんっ、先輩のおっぱい、背中に当たってます♪」

「だからジッとしてろって。おっぱいがそんなに好きなら、あとで気が済むまで触らせてやるから」

「あはっ。約束ですよ♪」

「桃恵の髪、ふわふわしてて綺麗だよなー。ごしごしっと、

「私は先輩みたいに真っ直ぐな方がいいですけど……」

「ボリュームなくて苦勞するんだよ。こういうのも。さて、と。頭は……こんなもんでいいか。次は身体だな。隅々まで洗ってやるからな」

「そんなっ。自分で洗いますから」

「遠慮するなって。オレが小便漏らしたせいですぶ濡れなっちゃったんだしな」

「ほぐしたのは私ですけど……」

「あー、言われてみればそうだな。よーし、それじゃあ、桃恵にもちょっとした恥辱を味わわせてやろうか」

「えっ、先輩から恥辱を与えられてしまうんです……？」

恥辱だなんて、まさかのキーワードに、桃恵はときめいてしまう。一体どんなことをされてしまうのだろうか？

「ボディークリームでヌルヌルにしてやるから覚悟するんだぞ。おっぱいを蹂躪してやる」

「あんっ。先輩、そんな……、指が食い込んでますよっ」

星那の手は、大きくて男の子みたいだった。

それでもしっかりと手のひらは柔らかくて女の子している。

そんな星那の大きな手が、桃恵の乳房に食い込んでくると、桃恵自身も信じられないくらいに歪んでみせた。

「わわわ。私のおっぱい、こんなに潰れて……んあっ、す、凄いです。先輩にじゅーりんされちゃってますねっ」

「おお。おっぱいってこんなに柔らかいのか♪ 無限に指が食い込んでいくぜ」

「あんっ、くすぐったいです」

「ぐへへ、いいパイパイをしてるじゃねえか。こっちはどうなんだ？」

「あっ」



桃恵は思わず身体を縮こまらせてしまった。

それも無理もないことだと思う。

星那の男の子している指先が、少女の敏感な割れ目へと食い込んできたのだ。

桃恵の秘筋は、ふっくらとしているが赤ん坊のような佇まいをしている。

産毛さえも生えていなくて、シュッと刻まれた縦筋に桜の花びらが一枚乗っかっているだけの、正真正銘の『おまた』だ。

おまんこと呼ぶことさえもおこがましい、それほどまでに幼稚な秘筋だった。

「んあっ、先輩っ、そんなところを触ったら汚いですっ」

「どうしてだ？　こんなに可愛いのに」

「か、可愛いだなんて。赤ちゃんみたいで……それにすぐにその……エッチな気持ちになると……その……」

「んふ。もうこんなに熱くなってるじゃないか。ボディソープのヌルヌルじゃねえよな、これ。まだそんなに泡立ってねえし」

「はうう～。先輩のおしっこ飲んでるときに、感じちゃいました」

「正直でよろしい。それじゃあ、桃恵の可愛いまんこを綺麗にしてやるか。シュシュッとな♪」

「あっ、あひっ」

星那の指先が秘筋に食い込んでくると、イタズラっぽく蠢く。その刺激に桃恵が耐えられるはずがなかった。

「らめですっ！ 先輩の指で変な気持ちになっちゃいます」

「オレの指先がそんなに感じるのか？ ふふ、オレもなかなか女泣かせだな。こんなことするの初めてなのに」

「先輩の初めて……あひっ」

「おう、初めてだぞ。まさかこんなに感じてくれるなんてなあ」

「だめっ！そこは敏感だからっ」

ダメだと言いながらも、桃恵は無意識のうちに脚をMの字に開き、赤ん坊のような割れ目を晒している。

まるで触って欲しいと言わんばかりに。

「ふふ。口では嫌がってても、身体は正直みたいだな。桃恵の大事なところ、熱くて硬くなってきたぞ。それに開いてきてる」

「先輩がエッチなことするから、ああん！ダメ、それ以上食い込んでくると、あっ、ああん！」

「クリちゃんが大きくなってきてるな。そーれ、クリクリ～♪」

「ヒギイ！」

グチュグチュとエッチな音を立てながら、ボディソープが泡立てられていく。

いやー、

泡立てられているのは、ボディソープの泡だけではない。桃恵のエッチな体液も混じり合って、淫靡な音を奏でている。

女の子の気持ちよく感じる、優しく愛でるような愛撫。

「クリちゃんを感じやすいのか。ここはどうかな？」

「あ、ふっ、ふうう！」

桃恵の背筋が泡立つ。

星那が、うなじを舐め回したのだ。

「れろお……。おおう、桃恵の首筋、汗で酸っぱいな。それに日なたの香りが口に広がって、なかなか美味いぞ。ぺろぺろ」

「あっ！ あっ！ あっ！ ダメッ！ なんか、変なのきちゃう！
も、もう……」

星那にクリトリスを弾かれたのがきっかけだった。

「がはっ」

もっと可愛い喘ぎ声を上げているところを星那に見て欲しいのに……、桃恵は股間から生み出される電流にむせてしまう。

「っ！ うっ！ うぐ！」

上手く息ができずに、桃恵は咳を堪えながら絶頂に絶頂を重ねていく。

「ふふ、オレの指がキュウキュウ絞めつけられてるぜ」

「おごっ！ 開い、ちゃ……あぐううう！」

桃恵は身体中を駆け抜けていく快楽に、身体を反らしてしまう。
そのM字に開かれた股間から、

ぷっしゃあああああ！

勢いよく黄金水が噴きだしてきたではないか。

「おお、気持ちよすぎて漏らしちゃったのか？ クジラが潮噴いてるみてえだな」

「あぐっ！ うぐっ！ ぐう！」

「ははっ、止めようとしても無駄だぞ。桃恵のマンコがキュンキュン可愛らしく痙攣してるだけだからな。オレがほぐしてやる」

「うっ、ううっ……！」

プシッ！ プシュッ！

プッシュウウウウウ！

どんなに止めようとしても、桃恵の赤ん坊のようなおまたが虚しく痙攣するばかりだった。

そのたびに、勢いよくおしっこが噴き出してしまう。

やがてその痙攣も弱々しいものになり、

じょぼぼぼぼぼぼ……。

勢いを失った聖水が股間の泡を洗い流し、赤ん坊のような秘筋が露わになる。

桃恵の股間は快楽にパッキリと割れ、ややグロテスクな花を咲か

せていた。

「んふっ。どうやらオレのテクニックもなかなかのようだな」

「ふええ……先輩の指、凄かったですう……ひっく」

しゃくり上げるようなハッキリをすると、桃恵は力なく後ろに倒れ込んでしまう。

そしてそのまま星那に抱き留められると、気を失ってしまうのだった。

ただ、失神しても女としての本能なのだろう。

桃恵の淫洞は、星那の指先を求めるかのようにヒクヒクと、いつまでも痙攣していた。



体験版はここまでです。
ここまで読んでくれてありがとうございました！

大決壊シリーズ・配信中！

